

---

# つぼみ

相良 マミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つぼみ

### 【Nコード】

N5298T

### 【作者名】

相良 マミ

### 【あらすじ】

付き合い始めて一ヶ月ほどの彼女とのデート中。

「ねえ、なんで私たち、今ここにいるんだと思う？」

突然、彼女にそう問いかけられた俺は……

「ねえ、なんで私たち、今ここにいるんだと思う？」

付き合い始めて一ヶ月ほどの彼女に突然そう聞かれて、うろたえない男はいないはずだ。

春休みの初日。そして彼女の誕生日。カミサマまで祝福してくれているかような爽やかな晴天だ。

彼女の希望を最優先して立てたデートプランは、高校生という俺たちの身分を考えてもまずまずの出来だと自分でも思う。市内の美術館で催されていた『印象派展』を鑑賞して、その隣にある大きな公園を散歩して、そのまま公園を抜けたところにあるシフォンケーキが美味しいっていうので有名なカフェに入って席を取ったところ。床も壁もテーブルも椅子も、すべてが白で統一された店内は、吹き抜けみたいに天井が高い。店の南側にある壁だけは全面がガラスになっていて、その向こうにある表通りに並ぶ街路樹が見える。外からの光で店の中は照明が要らないくらいに明るかった。

店内の壁と天井には大小さまざまな丸がたくさん描かれていて、それぞれの脇にはアルファベットで単語が書き込まれていた。下調べのために姉から貰って読んだ雑誌によると、この丸は一つ一つが星の位置で、アルファベットはその名前なんだそうだ。店内全体で天球儀を模しているらしい。そう言われると、オリオンのベルトらしき三つ並んだ点が見える。なかなかお洒落だ。

俺たちが案内されたのは、そんな店内の角に当たるテーブル席。彼女は、角が丸く落とされた四角いテーブルを挟んで俺の真正面に座ると、片手で頬杖をついた。並んで立っているときは少し下にある彼女の顔が、俺の真正面、数十センチの位置に来る。

俺が言うのもなんだけど、彼女は学年で五本の指に入るくらいにすごく可愛い。一学期に一緒にクラス委員をやることになったときは、心底ラッキーって思った。でも逆に言っと、付き合う前はそれくらいしか親しくした覚えはない。それなのに、彼女が何故俺のことを好きになってくれたのか、全く謎だ。俺以外にも彼女に惚れていた男はいくらでもいるはずだ。そういう奴らに憎まれていてもおかしくないと思う。

それにしても、今日の彼女はいつもよりもずっと綺麗だ。白い肌、適度に手入れしている眉、人形みたいな大きな瞳、自然なウェーブを描く髪、さくらんぼ色の唇。そしていつもの制服からは想像もできなかった、見慣れない細かい花柄のワンピース。それこそ、さつき観てきたルノワールの絵の中の光景を一部だけ切り取って持ってきたみたいに見える、思わず見惚れた。

彼女が空いている方の手で頬にかかった髪を弄ぶ。俺が好きな彼女の癖。その仕草が、年齢の割りに妙に色っぽく見える。彼女はそうやって指に毛先を絡めながら、店内を見回した。

そして、最後に俺の方を向き直って言った台詞が、冒頭のことば。

取り様によつては、どうしても解釈できる。何で俺と付き合っているのか、という意味か。それとも、このカフェが気に入らなかったのか。

「え……と……。ごめん、どういう意味？」

不安を隠して精一杯の虚勢を張りつつ俺が尋ねたとき、店員さんが小冷を持って来た。

俺はそれを受け取りながら、ケーキセットを二つ頼む。選べるケーキは種類がいくつかあったけど、二人とももちろんシフォンケーキ一択。ドリンクは、彼女が紅茶で俺はジンジャエール。

彼女は、店員さんが去っていくのを待ってから口を開いた。

「例えばね、今私たちはここに向かい合って座ってるでしょう？でも、それって本当に偶然の積み重ねによって成り立った結果だと

思うの」

彼女の言っていることが全然理解できなかったけど、とりあえず俺は頷くことにする。

「このお店が私たちの住んでる街にあるってことも、私たちが同じ高校の同じクラスだってことも、今日のお天気が晴れてことも、この街で『印象派展』が行われるってことも、一つ一つが起る確率はそんなに低いわけじゃないんだろうけど、でも、全部が一度に起る確率って限りなく低いと思うんだ」

発する言葉が見つからなくて、また一つ頷く。

「だって、ね。宇宙には太陽みたいな恒星がこんなにたくさんあって、その衛星はきつともつともつとたくさんあるんだよ？ これだけたくさんあるんだもの。地球以外にも、生物が住むのにちょうどいい位置にちょうどいい大きさの星があってもおかしくないでしょう？」

そう言つて、彼女は店内の壁や天井を見上げた。たくさん星々が、俺たちを囲んで静かに佇んでいる。彼女は目をきらきらと輝かせながら続けた。

「そんな中で、地球っていう星があつて、その星に酸素と水があつて、生物が生まれて、進化の過程でヒトが生まれて、私たちの祖先様たちが子を成して、歴史を作つていつて、日本って言う国で私たちの両親が生まれて、出会つて、同じ街に住んで、ちょうど同じ学年になるときに私たちが生まれたんだよ？ それってすごいことじゃない？」

「うーん……。そう言われると、確かにそうかもなあ」

「今、私たちはこの国のこの街でこうやって二人で過ごしているけど、もしかしてどこかで何かが少しだけ違っていたら、私たちのどちらかがこの街に住んでなかったかもしれないでしょう？ もしかしたらその程度じゃ済まなくて、どちらかが砂漠の国か氷の国に生まれたかもしれない。そう考えると、今自分がこうして生きているってこと自体が、奇跡に近いって思うの」

そう締めくくった彼女を、俺は多分相当マヌケな顔で見つめていたんだと思う。彼女が少し心配そうに俺を覗き込んだ。

「ごめんね、突然こんな話して。退屈？」

「いや、全然」

そんなこと、考えたこともなかった。まったく、彼女の想像力には舌を巻く。

俺が微笑んで見せると、彼女も安心したように目を細めた。そして、何かに気づいたように目を大きく開く。

「あ、来たよ」

店員さんが、頼んでいたケーキセットを運んできた。テーブルに置かれたふつかふかなシフォンケーキを見て、彼女の顔が花が咲いたように輝く。付き合っている彼女のこの表情を見て、喜ばない男はいないはずだ。

店員さんが去っていくとすぐに、彼女はフォークを手取る。

「いただきます」

そう言っ、彼女は、たっぷりとメイプルシロップをかけたケーキを一口大に切り、口へと運ぶ。そして両方を上げて首を傾け、本当に幸せそうな笑顔を作った。

俺もつられて笑顔になる。自分のフォークを手に取りながら、たった数百円で彼女のこの笑顔が買えるなら、ありだな、と思った。

（後書き）

ここまでお読みくださいますありがとうございます。もしよろしければ、感想などいただけるととっても嬉しく思います。もちろん「読んだよ」のご報告だけでも嬉しいです♪

\* \* \*

無言ダンテ様が主催された『創作五枚会』に便乗参加した作品です。

テーマ／幸福

禁則事項／手抜き禁止

（初出：2011/03/19）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5298t/>

---

つぼみ

2011年6月18日20時10分発行